

札幌開拓の先駆者

帯 広の同行者の実家へ行くついでに、札幌へ立ち寄ることにした。二〇年ほど前に学生時代を過ごした街が懐かしくなったのだが、そういえば、その頃、どうも腑に落ちないことがあった。研究室の助教授の引率で、何人かと車に乗せられ、他大学の実験施設へ向かう途中のことだった。車窓を流れる札幌市街を眺めながら、「百年ちよつとで、原野がこんなに立派な街になるんですね」とつぶやくと、「ほう」といった表情で、全員がいつせいに私の顔を見つめたのだ。

そんな大層なことを言ったかなと不思議だったが、感心されたようなので、まんざらでもなかった。しかし、あらためて考えると、どうやらそうではない。ろくに研究室に顔もださない馬鹿者が、少しはまともなことを言ったので驚かれたのだ。猿が人語をしゃべれば、仰天するのと同じ理屈で、皆が私をどのように見ていたのか、今になってよくわかった。

ところで、その札幌開拓の先駆者は大友亀太郎（二八三四～一八九七）という人物で、開拓使が札幌に本府を置く前に、すでに彼の手によって、この地に鍬が入れられていた。

大友は天保五年に現在の神奈川県小田原市の農家に生れ、近村出身の二宮尊徳の門を叩いた。その後、

幕府から蝦夷地開拓の要請を受けた尊徳に代わって、開拓メンバーの一人として、安政五（一八五八）年に箱館へ渡った。以降八年間、箱館近辺の開拓に実績をあげ、慶応二（一八六六）年に石狩の開発を命じられた。広大な原野が広がる石狩は、蝦夷地の重要な交通の起点であり、石狩川河口付近は有数の漁場で、蝦夷地開発の中心地として相応しい場所だった。大友は各地を検分して農業に適し、近くに川が流れ、交通の便もいい現在の札幌市東区を石狩開拓の拠点と定めた。

大友は、インフラ整備を開拓の本源と考えていた。特筆すべきは、「大友堀」と呼ばれた用排水路の建設であり、今の札幌の南三条東一丁目からまっすぐ北へ、北六条までとおし、そこから北東へむかって北十三条東十六丁目で伏籠川に注ぐもので、「一万両の大工事」と呼ばれた。大友堀の南三条から北六条付近は、創成川として今でも残っている。こうしたインフラ整備の後に開拓民を移住させ、しかも居宅、米などを扶助するなど、開拓に専念できる環境づくりを目指し、慶応四年に開拓田畑は四六町歩を超えた。わずか二年で東京ドーム約一〇個分を拓いた手腕には、二宮尊徳の教えが活かされていたのだろう。さらに大友は「空論同様」としながらも、開拓

三〇カ年計画をたてており、農民四四五戸、田畑八九〇町歩の開発を想定していたが、幕府倒壊によりこれは実現せず、明治三（一八七〇）年、開拓に打ち込んだ一三年間に終止符をうち、北海道を離れた。現在、大友の銅像は、平成二十三年の創成川アンダーパス工事の完成に伴い、創成川と交差する南一条通りに明治四十三（一九一〇）年の建設当時の姿で復元された創成橋の西橋詰に建っている。



大友亀太郎の銅像

[交通]札幌駅から徒歩15分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。